

台湾から見る

周婉窈

台湾大学教授

東アジアの現代史において、台湾と日本の関係をどう考えるか――。
学術的書籍としては台湾出版史上1位の9万部が売れた

「図説 台湾の歴史」(1997年刊行)。

先ごろ、60ページ強の「戦後篇」が書き下ろされた日本語版が刊行された。

著者の周婉窈・台湾大学教授を招き、広い視野からアジアの問題を考えている

山室信一・京都大学教授と対談してもらった。

山室信一

京都大学教授

山室 今年、日本と台湾の関係を現代東
アジア史の中で見直す好機だと思います。
サンフランシスコ平和条約の発効55周年、
日本の主権回復55周年、同時に日華
平和条約調印55周年です。サンフラ
ンシスコ平和条約の第2条第2項は

「日本国は、台湾及び澎湖諸島に対す
るすべての権利、権原及び請求権を
放棄する」と規定しましたが、どこ
に放棄し、台湾がどこに帰属するか
は規定しなかった。しかも、195
2年4月28日の条約発効の7時間半
前に、日本と中華民国は平和条約を

締結した。この日華平和条約でも、台湾が
どこに帰属するかは規定しなかった。
台湾はこの日から日本の領土でなくなっ

たわけです。同時にサンフランシスコ平和
条約の調印には中華人民共和国も、中華民
国政府も招かれなかった。つまり、台湾と
中国と日本との国際法上の関係
は、宙ぶらりんになってしまった。

また、今年、日中国交正常化
35周年です。72年9月29日に日
本と中華人民共和国で共同声明
が発表され、国交「正常化」と
言われましたが、それは日台国
交断絶35周年を意味します。日
本政府は、台湾が中華人民共和
国の領土の一部であるとの主張

を理解し尊重する、という「一つの中
国」論をとった。国際法上問題なのは、
大平正芳外相談話をもって日華平和
条約は終了と表明したことです。

日華平和条約を、外相談話だけで
破棄できるかどうかには問題があり
ますが、中華人民共和国が国連に復
帰したこともあって、日本は台湾を
切つて戦争状態を終結させた。そう
いう形で日中台関係が35年間続いて
きましたが、今、ねじれ現象が起きている。
中国の台頭に対して反中国を掲げる人々が
親台湾という形で台湾を利用する、とい
う動きがあります。

それから、今年、日中戦争70周年、盧溝
橋事件70周年です。7月7日の中国の報道
を見ると、これまで強かった抗日戦争勝利
の色彩が薄れてきた。他方、日中戦争にお
ける国民党軍の役割を高く評価する方向が



写真=青木 彩

出ている。これは「一つの中国」に向けて
の布石でしょう。しかも今年の7月1日は
香港返還10周年で、「二国兩制」問題とも
絡んできます。

そして何より、今年、台湾の戒嚴令(注
1)解除20周年です。周さんのご本(「図
説 台湾の歴史」)はちょうどその半ば、
10年前に書かれている。この間、台湾の民
主化は進んできたわけですが、一方で台湾

史の独自性についての認識が進
むと同時に、経済的には中台間
の関係がきわめて緊密化してき
ているという、相反するベクト
ルが交錯しつつ、模索状態にあ
るように思われます。

「台湾史」という
カテゴリー

山室 そこで、この20年ぐら
いのアジア、日本と台湾をめぐる動きの中で、
「台湾史」というカテゴリーを提出された
意味をうかがいたい。どんな観点から台湾
史が必要だと考えられましたか。

(注1)戒嚴令 台湾では、1947年2月28日に勃発し
た2・28事件(注5参照)以降、蒋介石が率いる国民党
政府によって言論弾圧が強化され、49年5月20日、台湾
省行政長官・陳儀によって戒嚴令が施行された。台湾
総統・蔣経国が87年7月15日に解除するまで38年間に
わたって施行された。

歴史学
と
現実政治

東アジアと日本

圳(注6)などを取り上げて、日本の植民地統治が台湾の近代化に貢献したことも記述されています。それを受けて、彼の故郷・金沢では、台湾の近代化に日本人がいかに貢献したかが顕彰されている。台湾からすれば、井戸を掘った人として恩義を忘れないという美徳が示されているのでしようが、そこには日本の植民地統治はいいことをした、というストーリーに組み込まれてしまう側面があることは否めない。植民地化と近代化の問題をどう考えるかということです。

周 台湾の近代化は、清が台湾を統治していた最後の10年間に進んでいた。ただ、大規模な近代化は確かに日本時代に進められました。インフラストラクチャーなどの建設に関していえば、日本統治の貢献は大きかった。ただ、別の観点があります。教育で台湾の歴史を教えないこと、日本語で教えること、教育を通して台湾人の文化、伝統言葉(はくご)を剥奪する(はくご)ような側面もある。

山室 本の中では、それはあまり強調される。その辺をどう評価すべきなのか。
周 確かに伝統文化や言葉は日本時代は抑えられていた。皇民化から、戒厳令が解除された87年までの50年間に、台湾人は自分は何なのかという自信も喪失してしまっただけ。その点では問題は韓国よりも複雑です。
山室 教育の問題にしても、たとえば日本統治期に20万人が就学のために台湾から日本に渡り、6万人近くが高等教育を受けた。だから、台湾の近代化を日本が担ったところもあるでしょうが、日本によって近代化され、教育を受けたことが、中国の本土の人から見ると台湾は日本に奴隷化されたとなってしまう。それが、45年以降の悲劇を生むこととなります。

つまり、本土の人には、侵略戦争を戦ってそれに勝った民族だという意識がある。そして、台湾の人々は、植民地化されて日本化されてしまったとみなした。そのギャップ。台湾の人々は、30年代から80年代まで、中国本土の人から見て複雑な立場に置かれた。日本の植民地統治が台湾に残した問題とは、むしろ戦後にそういう混乱を引き起こしたことにあるのではないか。

それを考えるとき、日本への協力者、御



ていないようですが……。
周 でも、読めば分かりますね。第9章の「植民地化と近代化」で、日本統治の両面を議論し、両者の複雑な葛藤にも言及しました。

山室 周さんの場合、植民地化と近代化は、皇民化とはまた別だという分け方をされている。その分け方の基準はどの辺にあるのでしょうか。
周 皇民化を実施する前の近代化には、台湾人を日本人に変えるという意思ははっきりしなかった。主に西洋の知識文明などを勉強させることが目的でした。皇民化は、日本式の生活をして、天皇に忠誠を誓い、台湾人ではなくて日本人として存在してほしいという教条的なものになりました。
山室 何でそれを問題にするかというところ、朝鮮の問題にも重なるからです。朝鮮の場合には、90年代になって近代化をめぐって問題化した。つまり、植民地化の過程の中においても近代化が進んだのだという評価の仕方が出てくるわけです。

どんな植民地でも生産性を上げ、インフラを築き、人々の生活を豊かにする。それが、世代間の差異の問題がある。周さんは、そうした台湾の異なる立場にある人や、教育を受けた時期が違う人の歴史認識のギャップを埋めよう、とされているのだらうと思いますが。

周 歴史記憶についてですけど、日本統治の時期、特に皇民化運動によって、当時の若者たちの国家アイデンティティーの帰属先は日本でした。

その後、日本が中国に戦争を起こさなければ、別の結果が出てくるんですが、31年から日中間の戦争が15年間続き、中国人に反日感情を引き起こした。その後、中国本土の人が台湾に来て、台湾人を日本人の影のように扱いました。台湾人は、国家のアイデンティティーとは別に民族のアイデンティティーとしては中国人だと考え、戦後初期は、自分も中国人に戻りたいと考えていた。ただ2・28事件になってまた一変しました。そのギャップは非常に大きい。たとえば日本統治の50年間に、中国で何が起こったのか、台湾人はまったく知らない。辛亥革命、軍閥の戦い、抗日戦争、国民党と共産党との内戦。2・28事件のときも国・共

ラ整備をしなかったら収奪できないわけですから、たとえば米や砂糖にしても、生産性を上げて日本に持つてくるためには、教育や整備をしなければいけない。それは一方では近代化なのですが、結果としてそれがどこに行つたのか。たとえば台湾における鉱山開発などで交通網が近代化されたにしても、資源は全部持つていってしまつて、台湾に残るのは残骸だけとも言えます。

周 近代化や植民地化の功罪を問うとき、韓国と違うのは、台湾人は必ず国民党の功罪と比較することです。

山室 日本の側からそういう問題を投げかけるのは酷だと思う。日本が植民地化するわけだから、日本化という形でしか近代化はできないわけですね。逆に日本の近代化に反対すると、近代化そのものを否定しなければいけないという、苦しいところに追い込んでしまうことになる。たとえば、30年代の朝鮮では日本から強要されるものではなくて、民族の置かれた自然環境や生活様式から科学や発明をすべきだ、という発明運動がありました。オンドルの再評価といった形で適正技術、地域の伝統や生活様式に即した近代化を、日本が阻害した側面があ

の複雑な関係は分からなかった。「白色テロ」(注7)にも、訳が分からないまま巻き込まれました。

山室 歴史認識の空白や欠如がいかに悲劇を生むかということが、白色テロや2・28事件を見ると、よく分かります。同じような歴史の欠落は、60年代前後の北朝鮮への帰国運動にもあった。「楽園」へ帰つたら、そこで待つている人はぼろぼろの服を着ているという歴史認識の欠如は、不幸です。

東アジアの中の台湾人

山室 近代東アジアの問題を考えるときに、台湾人がアジアでどういう役割を果たしたのかについての歴史も、付け加えなければいけないと思う。台湾人は台湾島内にいた場合には二等日本人ですが、関東州や満州国に行くと、中国人と日本人の橋渡しという意味で日本人と同等に扱われる。台湾島内では支配される側が、新しい植民地に行くくと支配者として振る舞う部分があった。日本帝国という大きな枠内における台湾人

(注7) 白色テロ 共産党に対抗するため、国民党が行った秘密で残酷な方法による弾圧。

の役割というか、位置付けがあるだろうと思います。

同様に日本国内でも沖縄の人は最下位に置かれていましたが、台湾に行くとき高い地位だと考える。つまり、帝国のシステムとして抑圧の移譲がある。台湾の島だけで台湾人が生きていたわけではなくて、アジアの中で生きていたということをや日本や台湾の読者にも伝える必要がある。

周 人間や民族を等級で分けて差別するのは、東アジアに共通の現象といえるかもしれませんね。台湾内部でも大いに反省が必要です。台湾は外国人労働者をたくさん受け入れましたが、非常に見下している。これも同じ抑圧の移譲という問題で、東アジアの人的交流の中で考えるべきことです。

山室 東アジア史という形で台湾史も位置付けなければいけない。日本統治期でも、中国に留学した「半山」といわれる人もいるわけで、彼らの役割も見ること。台湾史だけではなくて、中国史、日本史との関係をどう見るといいうことになってきます。私は今の段階で台湾の歴史を書く、台湾

主義」もいいのではないか。昔、日本の大東亜共栄圏の考え方が失敗した理由は、理想と現実にあまりにも開きが大きかったから。でも東アジアの範囲で理念を持ってやれることがあります。

山室 大陸国家としての中国との対比で、台湾が海洋国家として大きな可能性を持っているという、その歴史を周さんはご本で書かれたのだなと思います。そこで、どうしても中国との関係が出てくる。今年には香港返還10年で、もともと「一国両制」は台湾を同一化するためにつくったものだし、「50年不変」と言ったわけですが、

そうもなっていない。香港の返還以前、台湾は一つのジョイントとしての機能を果たしていた。たとえば、返還前は香港から台湾への留学生が年間3千人以上いたが、現在900人ぐらいに減ってきた。海洋国家としてのつなぎ手という位置付けはどうなればいいのか、と台湾の人々は考えているのでしょうか。周 台湾は海洋国家としての性格が明らかであるという認識は、もちろん学界の中では強い。知識人



やまむろ・しんいち 1951年、熊本県生まれ。東京大学法学部卒業後、衆議院法制局参事、東京大学助手、東北大学助教授などを経て86年から現職。専攻は法政思想運動史。著書に「法制官僚の時代」「カメラ」思想課題としてのアジア」「日露戦争の世紀」など、近著に「憲法9条の思想水脈」（朝日選書）がある。

の人々に歴史を持ってもらうというお仕事は重要だと思う。ただ、この本が目指しているわけではないけれど、一種の台湾独立派・台湾主体派が、台湾の独自の歴史を持つと同時に、ナショナルイズムとして他を排斥しない自国史をどう書けるかが問題です。周さんのご本はそれに成功している。どうやってそういう歴史が書けるかということ、日本でも中国でも韓国でも問題になってくるでしょう。

周 東アジアの国同士は欧米を見ているだけ、地理的には近いけれど、お互い理解も、海洋国家としてどう発展するかという可能性を探っています。ただ、政治問題で難しいのは、台湾は国際社会において国としての格も身分も持っていない。機能上は国であることに間違いありませんが、国際社会、特に中国は認めませんから。中台関係が難しい中で、香港返還は台湾人も注意深く見ているんです。たとえば一国両制が成功するかどうか、香港の民主化の問題、普通選挙、とくに行政長官や立法

会の選挙ができるかどうかを見ている。というのは、台湾は選挙にはとても慣れ

はしていない。特に台湾は日本に50年間統治されましたが、台湾人で日本の歴史を知っている人はごく少なく、韓国の歴史はまったく知らない。東アジアの国同士がお互いに理解し合うことは大きな課題です。

山室 杜正勝教育部長（文相に相当）のもとで進められている、台湾史から中国史、世界史という同心円的な歴史教育は、それまでの中国史から広がっていた歴史に対して、台湾からと言うわけですが、逆にまた台湾中心史観みたいになってしまっ、それもまずいなという気がする。

周 戦略上の問題かもしれませんが、杜先生は台湾の歴史を非常に重視している、台湾の教育界の人をどう説得するか考えていると思います。90年代初めには、教育界の主流は台湾史を教えることに強い抵抗感を持っていましたから。

香港返還10年と台湾の未来

周 これからは東アジアの歴史をトータルな視点を持つべきですね。たとえば本の知識や文化の交流の面では「新アジア

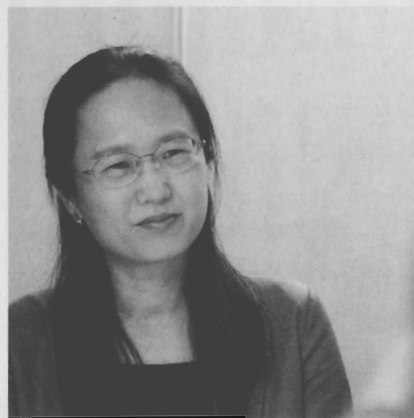
ているので絶対にそれを放棄しない。後戻りできないのですが、香港もそういう民主化ができるかどうか。できたら一国両制が保障されることになる。

ただ、台湾がさらに複雑なのは、民主生活を維持するだけじゃなくて、今の台湾人で30%ぐらいいる固い台湾独立派にとっては一国両制は絶対許し難いですから、ややこしいですね。

山室 戒厳令解除から20年を経て、民主化が定着し、同時に権威主義体制から抜け出した段階で、再び権威主義のもとに戻ることは、拒絶感が強いでしょうね。

ポストコロナアル、ポスト権威主義、グローバリゼーションの三つが重なってきています。そこでは、台湾社会そのものの固有の問題かもしれないけれど、秩序がうまくできていないのでは、という強い懸念を書かれていますね。

周 台湾の社会では、この20年に大きな出来事が一斉に起こりました。民主化、国づくりやネーションづくり(nation-building)、グローバリゼーションも、中国の台頭



しゅう・えんよう / Chou Wan-yao 1956年、台湾生まれ。国立台湾大学歴史学科で修士号、米イェール大学で博士号。91-93年、カナダ・プリティッシュコロンビア大学歴史学科で教える。94年台湾に戻り、中央研究院台湾史研究所副研究員などを経て、2006年から現職。専攻は日本植民地統治期の台湾史。著書に「日据時代の台湾議会設置請願運動」など。

によってどうなるのか。ポスト近代化の問題もありです。

山室 このご本は、そういう混乱に一つの線を引くというか、バラバラのところの一つ凝集点をつくったという点で、多くの人に読まれたと思います。それだけに、ここからどこに行くのか難しいのかなと。

周 先週までヨーロッパへ、約2週間の学術研究交流に行きました。ヨーロッパ人の台湾研究者が、台湾は金・銀・銅の宝の島で、社会科学の研究者にとってはいいケースタディだと言った。この20年間、国であろうがなかろうが、民主化をスピーディーにやっている。でも多くの問題を含んでいる。研究者にとってはいい対象です。
山室 でも、住んでいる人にとっては。(笑)
周 本日に毎日混乱している。台湾が中国の一部になったら、私はどう台湾史を書くのか。(笑)

山室 この本を書かれた時期は、戒厳令から10年ですね。同時に戦争世代の人々が亡くなつていくところです。世代がこれから変わっていくという点で、日本も同じですが、戦前の歴史がどんどん空白化していくわけです。そういうときに、読みやすい歴史で

中国史の分野で素晴らしい先生がいますが、欠けているのは日本史、韓国史ですね。

一つの問題は、日本統治の評価についてです。日本統治時代に高い教育を受けた人の多くは、日本の統治を高く評価している。中国国民党との比較の問題で、国民党の教育は彼らから見ればよくないもので、国民党の統治にも不満を持っている。戦後、台湾が日本を離脱した後、日本社会は戦争に対するいろいろな反省をしています。台湾は日本と隔離され、そういう知識が入ってこなかった。だから日本の教育を受けた人たちの思想や感情は化石化している。これは、台湾社会に大きな影響を与えました。

——小林よしのりさんの「台湾論」(注8)はお読みになりましたか。

周 ずいぶん前に読みました。これは日本教育を受けた一部の人の考え方を紹介したもので、まったく根拠がなく書かれた本とは言えませんが、我々は知識人として、彼らの思想と感情を超えるべきだと思います。ただ、どうしてこういう内容が書かれたのかは理解できる。彼らは国民党の統治と比較し、国民党のイデオロギーを排除する気持ちを持っていますから。日本統治を

若い人に伝えていくことに成功されたのは素晴らしい。

同時に、イラストを含めてビジュアル化することでイメージを膨らませている。歴史における想像力という点は、日本の研究者はあまり意識してこなかったことで、ご本を読んでもそういうこともしなければ、と思いました。それから、台湾みたいに対立の激しいところだからこそ、あまり断定をしないでいろいろな可能性のある見方を提示する工夫、という点でも学ばせていただきました。

歴史教育のもつ意味

山室 韓国では、東アジア史が高校の選択科目になることになっていきます。韓国は、日本との歴史的なあつれきもあるが、高句麗問題を含めて中国とも対立している。両方に対立しているときに、一國史ではなくて、東アジアの視点で対立を超える見方を

評価している彼らとは歴史家として論争はしませんが、戦争の中の不正義は若者に教えないければならないと思います。

他方、植民地支配の中で、宗主国と支配される国の関係は、支配当時は抵抗関係が激しくても、その後は親密な関係になることがほとんどです。イギリスとインド、アメリカとフィリピン、オランダとインドネシア……。台湾でも、日本の教育を受けた人たちが日本に親密感を持っているのは、変なことではない。一方、国民党の教育を受けた人たちは、日本の教育を受けた世代の親日感情を嫌っています。だから、イデオロギーを中心に置いた教育はすごく怖い。

「哈日族」をどう見るか

山室 韓国の場合は、一方で植民地清算や親日派糾明をやりながら、同時に戦後の李承晩政権以来、日本の教育を受けた人が登用されて、戦後の韓国をつくってきた。そういう二重性は、おつしやる通りだと思う。

ただ、もう一つ、グロバリゼーションの中で哈日族^{ハルチン}という、日本が大好きな世代がいる。その世代はアメリカや韓国も好きで、日本だけが好きなわけではないですが、



日本のマンガを原作として台湾で制作されたテレビドラマ「流星花園～花より男子～」から (©2001 Comic Ritz Productions Co., Ltd. 原作 集英社マーガレットコミックス 神尾葉子「花より男子」©1992 Yoko Kamio)

しようという提起がある。

台湾の大学でも歴史学とは別に、台湾歴史学部、台湾歴史系ができてきているというのですが、周さんが研究院から台湾大学に移されたのは、教育として何をやっていくとされているのでしょうか。

周 台湾では、大学の学部には台湾史の学科がまだないんです。あるのは政治大学と師範大学の大学院だけです。学部の場合はほとんど歴史学科の中です。大きな視野で台湾史を見ることもできるので、歴史学科に入っているのはそんなに問題はないと思う。今、台湾大学の歴史学科には西洋史と

日本から見ると、台湾の人はみんな日本が好きだというような議論になってしまふ。それは全然違って、好きな対象はほとんど変わって動いていく。周さんは哈日族の意味をどう見ていらっしゃいますか。

周 私の世代は国民党の教育を受けたので、大多数は反日感情を持っています。哈日族は私の学生の世代です。90年代以後は流行文化の影響を受けています。哈アメリカ族はちよつと少ないですね。文化的に日本や韓国のほうが近いので、若者たちは通じやすい部分を取り入れますから。

山室 たとえば少女マンガの「花より男子」が台湾で「流星花園」(注9)としてテレビドラマ化されるなど、韓国や台湾で作ったものを日本に持ってきてリメイクするとか、韓流から今度は台流、華流という台湾の流れになるなど、相互的なわけですね。

(注8) 小林よしのり著「台湾論」『新ゴーマニズム宣言スペシャル・台湾論』(2000年、小学館。01年、台湾の前衛出版から中国語版が出版された。日本の植民地統治に肯定的な記述などから台湾でも議論を呼び、不買運動や抗議活動も起きた。

(注9) 「流星花園」2001年に台湾で制作されたテレビドラマ。原作は日本の神尾葉子のマンガ「花より男子」。日本でも放映された。このドラマで登場人物の「F4」を演じた4人が「F4」の名でCDデビューした。

そういう流れができてきたのは、文化の高い・低いではなくて、それぞれが違いを楽しむようになってきたからだと思う。それはある種のつながりを生むでしょう。そういう人たちに、もつと歴史的なレベルでの理解を深めていければいいと思うのですが、なかなか追いつかない。

周 流行文化は、東アジア世界の接点になっています。流行文化は、こんなにもお互いを理解しやすいものか、という錯覚を与えてくれますから。日本で何かはやつたらすぐ取り入れるのは簡単ですが、かえって日本の文化や歴史とは何か分らず、誤解が起きている。台湾の人たちは『台湾論』などに書かれた現象がなぜあるのか、理解すべきです。理解は、あらゆることの第一歩です。

山室 日本では台湾を開発したという一面だけを取り上げ、そこに問題点を見ようとする「それは自虐史観で、間違っている」として排斥しあうなど、残念ながら議論が深まらず平行線状態にある。

司馬遼太郎さんの『台湾紀行』(注10)もその真意とは別に、政治的に使われてしまう。

安易な肩入れではなく

周 もう一つ、台湾人日本兵たちは、本当に大東亜共栄圏の理想やスローガンを信じている。実際には侵略戦争ですけれど、戦争をした人たちは別にみんな悪い人じゃないんです。開発や建設に献身的です。どう距離をとって見るか、混乱している。

山室 植民地統治と同じことで、例えば東南アジアで鉄道を建設したことは、確かです。しかし軍隊を動かすために鉄道を造ったのであって、開発することが主眼だったわけではない。ただ、やっている人はそう思うように教育をされたわけです。

逆に言うと、いかなる教育を与えられたかをまず実証的に明らかにすることが第一の課題であり、個々人の善意か悪意かでは問題は判断できない。歴史はある意味で、結果的なものを見るしかないわけですが、同時にどんな意図がそこに働かされていたかを見ていく。その意図と結果との関連性のメカニズムを説明して提供するのが歴史研究者の責務でしょう。

台湾の戦後史については、明確な結論はまだ出ないと思う。30年以上たたないと、

親日派が存在するからという点で、植民地支配はすべてよかったのだ、という話にすらされてしまふ。李登輝さんが来日して靖国神社に参拝すると、実際には合祀に反対する高砂族の遺族の人たちが存在するのに、台湾の人にはみんな靖国に祀られたがっているという形で使われてしまふ。台湾の多様性を二面化して政治的に利用することは、さらに対立を激化させることになる。

周 今、台湾社会が分裂しているのは、過去の理解が欠けているからです。政治家に利用されることも多い。歴史を利用して政治屋も、本当は歴史を知らない。これほど危険です。よく理解したうえで歴史を政治利用するのはいけないことですが、全然理解せず、知らないで利用しているのは非常に危険です。

山室 確かに21世紀は日本も中国も韓国も台湾も、歴史の政治的利用が強くなっています、それが若い世代の排他的ナショナリズムを煽っている面がある。

——そういう状況で、歴史学者が果たす

資料も全部出てこないですから。歴史は時間によってしか相対化し、客観化できない面がある。歴史家が現代の状況に発言しないとか、提言できないというのは、確かにその通りかもしれません。しかし、客観的に言えることはどこまでかということになると、やはり評論や政論とは違うスタンスが必要だと思えます。

周 私も、台湾の戦後史を書くにあたり、十分な「安全距離(safe distance)」があるとは思っていません。しかし、台湾社会の分裂の現状をいかに理解するか、という角度から始めるよう努力しています。本の「戦後篇」で「2・28事件」「白色テロ」「党国教育」「民主化運動」という四つのテーマを選んだのは、外国人が台湾の歴史を見るときに少しでも役に立てれば、という感じでした。

山室 これらのトピックは重要だと思えます。日本のテレビでは、台湾については常に混乱しているところしか映さない。何が混乱の背景にあったかが分かっていると、来年1月の立法院選挙や3月の総統選挙で、何が対立点か、もう少し分かると思う。

同時に、日本人が安易に台湾独立とか中



靖国神社参拝を終えた李登輝・前台湾総統=2007年6月7日、東京都千代田区で

べき役割は何でしょうか。
周 歴史研究者は歴史が利用されることを防ぐ能力もないですが、ただ、過去についてもう少し理解を深めれば、そんなに利用されなくなるでしょう。

山室 周さんが、中央研究院から台湾大学に移られたのも教育を重視されたからだと思います。これまでになかった台湾史を作っただけじゃなくて、それを教育していくことは重要です。

また、歴史の空白を利用する歴史学みたいなものがどんどん使われてくる。そういう危険性もあるので、それをきちんと指摘することは大事でしょうね。

台統一とか言うのではなく、何がその背景にあるのかを、きちんと見ていく必要がある。台湾に対するコミットメントの仕方は情緒的で、中国と台湾が対立しているからどちらかに肩入れするといった対応や認識に傾くのは問題だと思う。

76年の国際人権規約に即して言えば「すべての人民は自決の権利を有する」と定めているわけだから、台湾の人々も自決の権利を持っているはず。そういう国際的な位置付けを見ながら、同時に台湾の人々は何を望んでいるのかも発信していただくの二つをしないか、台湾の問題はなかなか解決しないだろうと思えます。

周 台湾内部で独立、統一は五分五分で、今は分からない状態ですね。

山室 それにあまり情緒的に関与しないで、客観的にどういう対応が望まれているのか、そのために国際法上でいかなる方策が必要であり可能なのか、そういう冷静な見方をしないといけないですね。

(注10) 司馬遼太郎著『台湾紀行』「街道をゆく40 台湾紀行」(1994年、朝日新聞社。97年、朝日文庫。李登輝総統(当時)との対談も収められており、李氏が総統就任後初めて台湾の本土化政策に言及し、司馬氏は中国の姿勢を批判した。